

日本全国に音楽療法を届けるための 「遠隔音楽療法」の現状と可能性を議論する ～音楽療法士の視点から～



相川 直子 ・ 林谷 嘉子
NAT音楽療法事務所

自己紹介

相川 直子
(あいかわ なおこ)

日本音楽療法学会認定音楽療法士

NAT音楽療法事務所代表

群馬を中心に県内外で障がい児・障がい者・高齢者施設等、様々な場所で音楽療法士として臨床を行う。

現在、群馬県高崎市で音楽療法事務所を設立し音楽療法を実施している。

小杉先生の遠隔音楽療法の研究に初期より携わり、実施にあたって研鑽を続けている。

林谷 嘉子
(はやしだに よしこ)

日本音楽療法学会認定音楽療法士

現在は東京・神奈川を中心に臨床を行う他、相川より誘われ、遠隔音楽療法に携わるにあたってはNAT音楽療法事務所所属として研究に携わる。

TH側の環境

1. CLをモニターに映す
2. CL側の音声がスピーカーから聞こえる



CLを映すモニター

- ※ 1 キーボード、マイク、スピーカーをミキサーに接続。ミキサーとPCを接続。
- ※ 2 モニター(TV,PC)の前に、ハウリングが起きないようにマイク、キーボードを設置

CL側の環境

1. THがTVモニターに映る
2. CLはTVモニターの前に座り、スピーカーからTHの出す音が聞こえる
3. CLの声・楽器音はマイクで集音
4. スタッフまたはご家族が同席しアシスタントとして参加

(安全確保、接続準備、楽器の操作補助等)

※ 1 THにCLが見えるよう、座席位置やWEBカメラの位置を調節

※ 2 スピーカーの位置と向き、マイク位置をハウリング起きないように調整する



遠隔音楽療法を実際に行って

【やる前の疑問・不安】

1. 想像がつかない
2. 機材への苦手意識、不安感
3. 映像を通して行うことへの抵抗感
→CDやDVDでやるのと同じ？
4. クライエントにどの位よりそえるのか
5. 共有感は得られるのか？
6. 対面して実施した時との感覚差
7. 通信遅延の度合い

【やってみての感覚】

1. 想像を超える”違和感のなさ”
2. 音を出してみても感じる遅延と感じない遅延が発生している
3. 映像の遅延に戸惑う
4. クライエントの出す音に敏感になる
5. クライエントの様子がつかみにくい

遠隔音楽療法を行うにあたっての工夫や配慮

1. 遠隔環境やタイムラグを利用した活動を行う（例：かけあいの活動、音楽が鳴ったら鳴らす止まったら止まるやり取りetc...）
2. 実際にCLには触れられないので、他の方法でコンタクトをとる
3. 対面のセッション時は、ジェスチャーや空気感で伝わる事が遠隔方式では伝わりにくいので、提示方法（言語提示、紙面等の提示）を工夫し、音・音楽のメッセージ性を強める
4. 映像がズれる事を念頭に置いての身体提示や視覚的配慮をする
5. 音楽療法士が準備の際に、遠隔音楽療法のCL体験をする
6. 予測不能な機械トラブル（例：PCの調子が悪い）が発生する事もあるのを了承の上、柔軟にその時の状況で最善な対応を選ぶ（例：シャットダウン後再接続、セッションの中断中止etc..）
7. スタッフの方々やご家族との連携を密にし安全を確保する

遠隔音楽療法の利点

1. 外出や移動が困難な方々や、離島や僻地、音楽療法士がいない地域や行きにくい地域の方々にも音楽療法が届けられる
2. 音楽療法士の移動時間がない・楽器を持って現場を移動しなくても良い
3. 利用者様も地域色がより強く、他地域と交流できる
4. 利用者様のパーソナルスペースがつけられる
5. 産休育休や介護等から復帰しやすく、継続支援がしやすい等働き方改革に繋がる
6. 遠隔音楽療法で提示方法を工夫することにより、自身の伝える力がつき、対面の音楽療法の際も提示幅が広がりスキルアップに繋がる
7. 音楽療法士同士の交流が幅が広がる
8. 音楽療法を学ぶ学生が、セッションの利用者様に大きな影響をあたえることなく現場を見学できる。

今後の課題と展望

1. 実際に遠隔音楽療法を行ったクライアントが少ないので、様々な領域のクライアントで様々な構造（集団、個人）でセッションを行い検討が必要
2. 実施できるセラピストの増員と技術の向上
3. 音楽療法を体験しやすくなる
4. 認知予防の観点でみたら、施設利用の前の早期の段階から、とりいれやすいのではないか？
5. なかなか家から外へ出ることが困難な方への社会とのつながりや社会復帰へのアプローチの1つとして選択肢になり得るようなシステムづくり
6. 日本の音楽療法士は女性が多く活動しているので、他の職種にない働き方を提案できるひとつのツールになりえる